

ベンジルアミノプリン剤によるオウトウの副梢発生促進

米野 智弥・斉藤 隆\*・佐藤 康一\*\*・北澤 由美

(山形県立砂丘地農業試験場・\*酒田農業改良普及センター・\*\*鶴岡田川農業改良普及センター)

Hastening of Interl Shoot Growth with Splaying Benzylaminopurine on Sweet Cherry Young Tree

Tomoya YONENO, Takashi SAITOH\*, Yasukazu SATOU\*\* and Yumi KITAZAWA

( Yamagata Prefectural Sand Dune Agricultural Experiment Station・\*Sakata Agricultural Extension Service Center・\*\*Tsuruokatagawa Agricultural Extension Service Center )

1 はじめに

オウトウポット栽培において早期に多数の花束状短果枝を着生させるためには、ポット移植前の養成期間に側枝を多数発生させることが有効である。そこで植え付け1年目の幼木において、ベンジルアミノプリン剤 (以下 BA 剤) による副梢の発生促進効果について検討した。

2 試験方法

供試品種はアオバザクラ台の '紅さやか' (1996, 1997), '佐藤錦' (1997, 1998) '紅秀峰' (1997) である。仮植時期は1996年は4月7日, 1997は4月11日, 1998は4月14日で, 仮植時に苗木を60cmに切り戻した。仮植前に苗ほに豚糞完熟堆肥1.8t/10aを投入し, 全面耕うんした。

土壌は砂丘未熟土で1996年は5月10日に複合被覆りん硝安加里140日タイプ (N:P:K=14:12:14) を1樹当たり100g施用した。また, 追肥として5月31日と7月2日に複合化成肥料 (N:P:K=12:5:10) を1樹当たり50gずつ施用した。1997年と1998年はそれぞれ5月6日, 5月30日に, 複合被覆りん硝安加里140日タイプ (N:P:

K=14:12:14) を1樹当たり100g施用した。

【試験1】

1996年に '紅さやか' を供試して散布時期と副梢の発生本数について検討した。散布時期は7月7日, 7月20日, 8月11日で BA 液剤100倍溶液 (300ppm) を散布し, 散布後主幹延長枝と競合する枝は基部1~2cmを残してせん除した。各区とも10樹について調査した。

【試験2】

1997年に '佐藤錦', '紅さやか', '紅秀峰' の3品種を供試して, BA 50倍 (600ppm) 液と100倍液処理での副梢発生本数の差異を検討した。処理は主幹延長枝が60cm程度伸長した6月23日に行い, 散布後主幹延長枝と競合する枝は基部1~2cmを残してせん除した。各区とも10樹について調査した。

【試験3】

1998年に '佐藤錦' を供試して, 主幹延長枝との競合枝剪除の有無と副梢の発生本数について検討した。処理は主幹延長枝が60cm程度伸長した7月1日に, BA 液剤100倍液を散布し, 各区とも5樹について調査した。

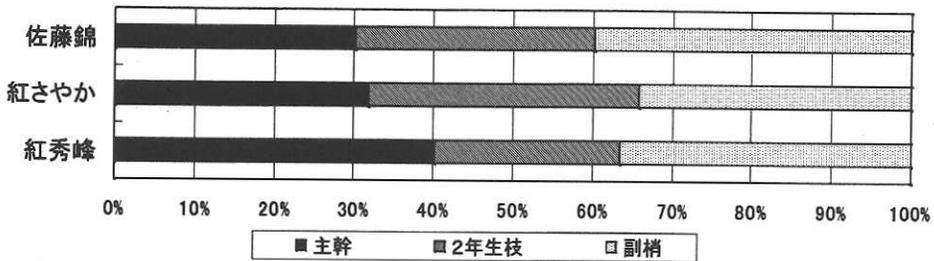


図1 ポット移植当年 (3年生樹) の花束状短果枝着果部位

表1 BA 液剤の散布時間と副梢の発生本数

(1996)

散布日	散布時樹高 (cm)	散布時延長枝伸長量 (cm)	副梢発生数 (本)	副梢発生*1 部位 (cm)	平均副梢長 (cm)
7月7日	118.2	62.0	10.0	99~127	26.6
7月20日	131.0	79.8	0.7	111~144	60.0
8月11日	130.1	80.1	0.4	125~138	2.7
無処理	-	-	0.4	114~135	62.4

\*1: 副梢発生部位=地上部からの高さ

(品種: 紅さやか, 処理倍率: 100倍)

表2 品種別・処理倍率別の副梢発生本数

(1997)

品種	散布倍率	散布時樹高 (cm)	散布時延長枝 伸長量 (cm)	副梢発生数 (本)	副梢発生*1 部位 (cm)	平均副梢長 (cm)
佐藤錦	50	125	61	12.4	90~130	28
	100	124	60	5.8	103~131	36
	無処理	—	—	3.8	98~128	80
紅さやか	50	143	69	15.7	83~137	20
	100	142	73	7.6	121~142	32
	無処理	—	—	3.3	131~138	48
紅秀峰	50	123	58	7.4	100~127	30
	100	126	63	7.6	110~142	31
	無処理	—	—	2.6	108~122	52

\*1: 副梢発生部位=地上部からの高さ

表3 競合枝剪除の有無と副梢発生本数

(1998)

区	競合枝剪除 の有無	散布時樹高 (cm)	散布時延長枝 伸長量 (cm)	副梢発生数 (本)	平均副梢長 (cm)
BA 散布区	無	58	65	0.4	41.0
”	有	62	65	5.0	54.0
無処理区	無	—	—	0.2	33.0

(品種: 佐藤錦, 処理倍率: 100倍)

### 3 試験結果及び考察

#### 【試験1】

散布時期による副梢の発生本数の差異を検討したところ、7月7日(主幹延長枝が60cm程度伸長)に散布した区では、主幹延長枝より10本の副梢の発生が見られたが、7月20日及び8月11日散布(ともに主幹延長枝が80cm程度伸長)では、それぞれ0.7本、0.2本と副梢の発生はほとんど見られなかった。副梢の発生部位は、BA剤の散布の有無に関わらず地上部からの高さが約100~140cm(主幹延長枝長40~80cm)の範囲で多いことから、この部分は副梢が発生しやすい高さであるものと推測された。このことから、散布時期は主幹延長枝が50~60cm程度伸長した時期が適当であると考えられ、4月上旬に植え付けた場合は6月下旬~7月上旬となる。

#### 【試験2】

各品種ともBA剤を散布した区は無処理に比べ、主幹延長枝からの副梢の発生が多かったものの、'佐藤錦'、'紅さやか'では、50倍処理は100倍処理に比べ副梢の発生本数が2倍程度と、発生促進効果が高かった。一方'紅秀峰'

では副梢発生に対する処理倍率の差は見られず、品種によってBA剤に対する反応が異なることが示唆された。

#### 【試験3】

1998年に'佐藤錦'を供試し、主幹延長枝との競合枝のせん除の有無と副梢発生本数を検討したところ、BA剤散布後に主幹延長枝との競合枝をせん除した区で副梢の発生が5本であったのに対し、競合枝をせん除しなかった区では0.4本と無処理区と同程度の発生本数であった。このことから、BA剤により副梢の発生を促進させる場合は、主幹延長枝との競合枝をせん除する必要があることが明らかとなった。

### 4 まとめ

以上の結果からBA剤を散布することにより、オウトウ植え付け1年目の幼木において副梢の発生を促進することが明らかとなった。散布時期が遅れると副梢発生促進効果が劣ったり、BA剤に対する反応が品種によって異なることは、リンゴにおける過去の研究と同様の結果であった。今後は副梢の多数発生した幼木をポットに移植した後の花束状短果枝の早期着生方法について検討する必要がある。